

アセトン血性嘔吐症（いわゆる、自家中毒）

愛媛医療生協

【病態】

通常は、食事から摂ったご飯などの炭水化物がブドウ糖に分解され、ブドウ糖を材料に肝臓にある解糖系で活動に必要なエネルギーを作っています。相対的な「飢餓（空腹）状態」、例えば、①前日の炭水化物の摂取量が少ない、②夕食に油っこいものを食べた、③前日にたくさん遊んだ後に夕食を食べずに寝てしまった、④感染症にかかった、などの時に、**血糖維持・エネルギー利用機構が乱れて**しまうことがあります。その結果、脂肪を分解してエネルギーを得るようになり、ケトン体が血中にたくさんできます。ケトン体は、脳にある嘔吐中枢を刺激して、繰り返す嘔吐などの症状がでます。

【誘因】

遠足や発表会、カゼをひいた時など、肉体的・精神的なストレスが引き金になります。夕食を摂取せずに寝た翌朝に起こりやすいです。

【患児の性格傾向】

男子にやや多く、やせ型で、自律神経および情緒不安定な、繊細な子どもに起こりやすい。吐き続ける発作が、特定の子どもの何度も繰り返すので「**周期性嘔吐症**」とも呼ばれ、小児の心身症の一つにあげられています。

【好発年齢】 2～10 歳位まで

【症状】

元気がなく食欲が落ちているなど思っていると突然吐き始め、吐くものがなくなっても吐き続け、胃液・胆汁を吐き、ひどくなるとコーヒー残渣様の吐物を吐きます。顔色は青くなってグッタリとして、顔つきは無欲状になり、ウトウトした状態になります。脂肪がエネルギー源として利用された結果、血中にケトン体が増え、息がリンゴの腐ったような臭いになります。尿にケトン体が多量に検出されるため「**アセトン血性嘔吐症**」と呼ばれます。臍周囲の痛みや頭痛を伴いますが、下痢はありません。

【治療】

グッタリしたり、食欲不振時には、ジュースや飴などの糖分を与えて、子どもに安心感を与えて熟睡させると改善します。吐き続けるようになったら、経口摂取を中止し、ブドウ糖の点滴が必要になります。嘔吐が止まると砂糖水、果汁などを少量ずつ与えます。脂肪分は数日間、控えた方がよいでしょう。繰り返し起こしている場合には、患児の肉体的・精神的ストレスを改善する対応も必要です。普段より少しずつ身体を鍛えるようにしましょう。漢方薬で小児虚弱体質の改善する作用のある「**小建中湯**」が著効することがあります。

【予後】

10 歳頃になると、筋肉量が多くなるとともに、体重当たりのブドウ糖の必要量が低下するので自然に発症しなくなります。 (2025. 4. 13)